

修士論文（要旨）

2016年7月

多文化主義国家オーストラリアにおける
「ボート・ピープル」排除

指導 阿部 温子 教授

国際学研究科

国際協力専攻

214J1951

折茂 那美

Master's Thesis (Abstract)

July 2016

The Exclusion of “Boat People”
from Multicultural Australia

Nami Orimo

214J1951

Master's Program in International Cooperation

Graduate School of International Studies

J.F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Atsuko Abe

目次

第1章 序論	1
1.1 問題の所在と本論文の目的	1
1.2 先行研究と本論文の位置づけ	4
1.3 研究方法	5
1.4 本論文の構成	6
第2章 オーストラリア多文化主義の変容	7
2.1 多文化主義の登場	7
2.2 1980年代の多文化主義	10
2.3 1990年代の多文化主義	12
2.4 2000年代の多文化主義	15
第3章 オーストラリアにおける「ボート・ピープル」の処遇	18
3.1 オーストラリア難民政策の概要	18
3.2 「ボート・ピープル」	25
3.3 「ボート・ピープル」に関わる政策の変遷	31
3.3.1 インドシナ難民受入れ	31
3.3.2 タンパ号事件と「パシフィック・ソリューション」	37
第4章 OSB (Operation Sovereign Borders policy / 国境保全作戦) と国民の意識の変化	43
4.1 OSBとは	43
4.2 国民の意識の変化	44
第5章 まとめ—多文化主義の可能性	51

年表

参考文献

要旨

オーストラリアは1970年代から多文化主義を国家理念として取り入れ、カナダと並んで多文化主義政策の成功例であると評価されてきた国である。人種、宗教、言語など多くの異なる文化が混ざり合うオーストラリアは文化的豊かさを包摂する国と多くの人々が肯定的に捉えている。オーストラリアにおける多文化主義の発生は、第二次世界対戦以降、人口増加を目的に実施された大量移民政策による国内の実質的な多民族化並びに、英国との絆が薄れたことで、政治、経済的にアジア・太平洋国家として生きなければならなかったという必然性に起因する。これにより、それまで堅持してきたヨーロッパ系白人だけで構成される単一民族国家形成を主眼とした「白豪主義」が捨て去られ、以後、多文化主義は移民の国民統合の手段として発展してきた。オーストラリアではその建国以来、移民・難民の受け入れは国防、経済成長に不可欠な要素であり、彼らは元来、国の資産として受け入れられてきた。

その一方で、近年では新自由主義イデオロギーの影響により、国益重視の傾向が顕著に見られ、ポイントシステムなどによって選別された高度技術移民は積極的に受け入れる傍ら、主にインドネシアなどから海を渡ってボートで非正規に入国しようとする「ボート・ピープル」は国益を損なう者として、またテロリストや侵略者として排除の対象である。近年では、「Operation Sovereign Borders (OSB/国境保全作戦)」のもと洋上ではボートが追い返され、オーストラリアへ上陸させないことを目的に第三国での強制収容が行われている。このようにして本来庇護を求める権利のあるはずの難民申請者(「ボート・ピープル」を含む)がその機会さえ奪われ、「難民が難民になれない」事態が起きている。多様性を受け入れる多文化主義国家オーストラリアにおいて、その国境では「ボート・ピープル」の排斥が平然と行われ、彼らの強制収容が許容されるその背景にはいかなる論理が働いたのだろうか。異なるものを受け入れようとする国内の動きと外から来るものを脅威とみなし、排斥しようとする国境でのやり取りは非常に対照的に見える。

しかし、このように強硬路線を崩さない政府がある一方で、近年これまでには見られなかった新たな動きが見られる。すなわち国内世論の変化である。それまでボートの追い返しや在外収容により不可視であった「ボート・ピープル」の存在がメディアが注目し始めたことで、彼らの真の姿、収容所の実体などがオーストラリア国内でも広く知られるようになった。そして、これらの報道がオーストラリア国民に意識の変化をもたらしたのである。この意識の変化は人権擁護団体や教会といった一部の「ボート・ピープル」擁護派だけに留まらず、あらゆる人の中で見受けられる。すなわち、世論における新自由主義に抗する新たな潮流の発生として捉えられそうなのである。今オーストラリアでは、多様な人々が団結し「ボート・ピープル」に関する正しい情報の開示と倫理的、道徳的価値観に基づいた措置を求めている。

本論文では、このように新しい動向が観察される昨今において、国民の意識に変化をもたらしたその原動力には、オーストラリアが国民統合(=ナショナル・アイデンティティ)の理念として築き、今日まで維持してきた「多文化主義」の存在があるのではないかという立場に立

つ。その上で、この主張に基づき「ボート・ピープル排除」の歯止めとなりうる論理としての多文化主義の可能性を検討する。

以上

参考文献

・ 和文

浅川晃広, 2003, 「オーストラリアの移民政策と不法入国者問題ー「パシフィック・ソリューション」を中心にー」, 『外務省調査月報』(1), pp.1-32.

飯笹佐代子, 2007, 「国境管理をめぐる政治ーオーストラリアのボートピープルからの考察ー: 周縁からの国際政治」, 『国際政治』(149), pp.77-92, 総合研究開発機構.

飯笹佐代子, 2015 「豪州の「対ボートピープル戦争」ー変幻自在で脱領土化する排除の「境界」ー」, 『21世紀東アジア社会学』(7), pp.35-49, 日中社会学会.

塩原良和, 2005, 『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義ーオーストラリア・マルチカルチュラルリズムの変容』三元社.

塩原良和, 2008, 「あらゆる場所が「国境」になるーオーストラリアの難民申請者政策」, 『Quadrante:クヴァドランテ:四分儀:地域・文化・位置のための総合雑誌』(10), pp.151-164, 東京外国語大学.

塩原良和, 2015, 「制度化されたナショナリズムーオーストラリア多文化主義の新自由主義的転回」, 山崎望編, 『奇妙なナショナリズムの時代: 排外主義に抗して』, pp.165-195, 岩波書店.

杉田弘也, 2013, 「「タフで人道的な」対策を模索するオーストラリアのボート・ピープル政策: オーストラリア多文化主義の「ドリアン・グレイの肖像」」, 『神奈川大学国際経営論集』(46), pp.1-22, 神奈川大学経営学部.

ハージ, ガッサン, 2003, 『ホワイト・ネイションーネオ・ナショナリズム批判』, 保刈実・塩原良和訳, 平凡社.

・ 英文

Coughlan, James E., 1991, "International Factors Influencing Australian Governments' Response to the Indochinese Refugee Problem", *Vietnam Generation*, 3(2), Article8, pp.84-97.

Heywood, Philip R. & Stanley, Hannah, 2015, *Rights and wrongs of Australian Government asylum seeker policy* [working Paper], Queensland University of Technology.

Jakubowicz, Andrew, 2005, "Multiculturalism in Australia: Apogee or Nadir?", *Canadian Diversity*, 4(1), pp.15-18.

Jupp, James, 2007, *From White Australia to Woomera: The story of Australian Immigration*, Melbourne, Cambridge University Press.

Penelope, Mathew, 2002, "Australian refugee protection in the wake of the Tampa", *The American Journal of International Law*, pp.661-676, The American society of international law.

Neumann, Klaus, 2015, *Across the Seas: Australia's Response to Refugees: A History*, Collingwood, Black Inc.

Soutphommasan, Tim, 2012, *Don't go back to where you came from*, Sydney, NewSouth Publishing.